

## 小兒の救護事業

文學博士 下 田 次 郎

西洋では勞働者殊に女子が日中會社工場などに出で、勞働に従事して居る間、困るは其子供の仕末である、固より家裕にして乳母や留守番の置けるほどならば、女は勞働に出掛けはすまいが、糊口の爲め止むを得ず出るので、一、番子供の仕末に困るのである、そこで子供預り所(託兒所)といふものが、都會には出來て居て、朝出勤の時小兒を其所へ預けて置て、日中其世話をして貰ひ、夕歸る時立寄て小兒を連れて行くやうになつて居る誠に良い仕組である、それで今自分が實際見た託兒所の一二を紹介しようと思ふ。

始めに見たのは獨逸のライプチヒ市の一託兒所である、(明治三十四年一月十九日朝午前參觀)。此日

は土曜で少く四十人許りの小兒が居た、平常は其倍位來るといふ。世話をする婦人が二人付いて居た、子供は幼稚園に行く位の年配の者ばかり、中には腫物のある者、破れた着物を着て居る者も居た。仕事は大抵幼稚園で爲るようなもので、行つたら、特別に小兒に色々やらせて觀せて呉れた。

「獵人」といふ遊戯は「獵師」三人、「獵犬」三匹で一匹の「兎」を追ふのである。「郵便」といふのは、驛車を形取りて、二人が馬となつて前に立ち、それに綱をつけ、一人が郵便屋となつて後から綱を持ち、その綱と綱との中に四人の子供が這入つて場内を廻るのである、他の子供は圓形になつて二驛車の廻るに合せて歌を唱ふ、其他徒手體操、行進運動をもした、皆それに合ふやう面白い歌が出來て居る。

次に見たのは、巴里の第五區ブラス、モンジュといふ所の一託児所である。(三十五年二月四日參觀)。託児所のことを佛國ではクレシユといふ。自分の見た託児所は新築で、萬事能く整ひ、理想のものである。家の前部に廣い一室があつて、中央に圓形の低い木の手すりが二重に出来、子供が其内、又は外に立ち、又は倚れて遊ぶやうになつて居る、室の周圍には椅子が並んで、大勢子供が座つて居る。又室の壁に沿ふて鍵の手に子車が多計り並んで、上から天幕のやうに覆ひが掛り、中に、赤兒が寝て居る。次の小さい室には、寢臺が澤山備へてあつて、食後など子供が眠くなると、此所に寝かすのである。その次の部屋は二つに仕切り、一方は庖厨で、子供の食物を調へ、牛乳など貯へてある、他の一方は病床で、病氣の時はこ

へ連れて来る。奥の左側は風呂場、便所となつて居る、子供は中々便の世話が厄介である。寢床を始め、すべて極めて清潔である。子供は生れて十五日の者より三歳までの者を預り、定員は三十人であるが、申込みが多くて入れ切れぬといふ一日十五サンチーム即ち六錢を拂へば、着物から食物をすつかり給して、世話をして呉れるのであると、(向ふでの六錢は、日本では二錢にも當らぬ)世話をする婦人が二人、一人は助手で一人は主任で、子供は皆主任の人をマンマ即ちお母さんと呼んで居る。此託児所の設立及び維持は市よりの出金及び寄附金に依るといふ。第五區だけでクレシユが三つある、巴里には二十區あるから、全體では餘程あるであらう。

西洋には斯様に唯日中子供を預るのみならず、棄

兒、貧兒、孤兒等を引取つて養育し、教育する所がある、其自分の見たもの、中で、最も大規模に出来て居て、感心したのは、伯林のと、巴里のと、聖得斯堡のとである。

伯林で見たのは、アルテ、ヤコブ町の孤兒院である。(明治三十四年六月二十一日午前參觀す)院長シューステル氏親切に案内せらる。此所には赤兒より十四歳までの者を收容し、六百十人位居た。收容の際には先づ湯に入れて身體を清潔にし、病兒は別居せしむる。行つた時には、外來室に二十人許りの子供が居つた、多くは顔色蒼白にして、營養不良を示して居た。平常大きな子は湯札を持つて町湯にゆくことが出来る。衣服、制服(黒色、帽子、シャツは院より供給せられ、又一年に靴一足、毛糸の靴足袋二足を貰ふ。其他外よりの着物

シャツなどの贈物が澤山あつて、それ／＼分與される、寢床は簡單で、頭の所に引掛けのある棒があつて、それに衣服を吊し、下の所には、齒磨、楊枝を入れる囊がある、朝は六時に起き、八時半に寝る、尤も幼兒は此限りにあらず、食事は六歳以上の者は食堂に行き、祈りをして後食す。飲料は一切水、料理人、肉と馬鈴薯を出して我々に試食せしめた。大きな娘は次の室で別に食事する、生徒の中から取締を命じて世話をさす。食後は運動場に出て散歩し、中には砂いぢりをする小兒もある。院内には學校があつて、大きな小供は教育せられる、十五歳以上の娘で、嘗て此處に居た者が、家政等を習ふために此所へ来る者もある。嬰兒の養育は、醫學の發達せる獨逸國、殊には其首府のことにて、設備も世話も實に行届いて居る。

嬰兒が二十四人居た、定員は六十餘人といふ、赤  
 兒は生れて八日目のもの、二週間位のもの、色々  
 あり、雙子も居り、皆小い寢床にねて居た。病室  
 傳染病隔離室もある、乳は子の質によつて種々の  
 濃薄、混合、分量あり、乳の壘を運ぶ器、乳を温  
 める器械、砂を入れて洗ふ仕掛け、皆精巧に出来  
 て居り、浴室、病室、藥局、洗濯所、乾燥室など、  
 孰れも設備が完全である。嬰兒收容所は五年の後  
 には、二倍以上に擴張せられるので、今は出来上  
 つた一部分に收容して居るのであるといふ。此方  
 はドクトル、パッチンといふ醫師が委しく案内せ  
 られた、今一人醫師が居るといふ。此院の外、伯  
 林附近にクラインペーレン、ルンメルスブルグ、  
 リヒテルフェルデの三ヶ所に孤兒院があつて、伯  
 林市より毎年凡百八十萬マルクを支出するといふ

パリには小兒救護院といふて、パリの南部ダング  
 エール、ロシユロー大路にある、明治三十五年二月  
 七日參觀、此所は棄兒、貧兒、孤兒を收容し、又  
 日中子供をも預る。一體佛國は、人口が餘り増さ  
 ず、寧ろ減する傾がある、佛國では生活の困難と  
 か、他所並みとかの理由で多くの小供をもつを欲  
 せず、人工の避妊を行ふて二人の子供に止める親  
 が随分ある、親二人に子二人ならば人口が殖へぬ  
 譯である、パリなどでは申し合せたやうに二人以  
 下の子を有つて居るものが多い。そこで國家の繁  
 榮上、國又は市などが、棄兒を收容し、又は棄て  
 ぬ前に持て越さして、之を公費で養育し、以て人  
 口の増殖を謀つて居る。此パリの少兒救護院は、  
 其主なる收容所の一つであつて、内に棄兒養育院  
 がある、行つた時には十五六人の棄兒を收容し、

乳母が附いて乳を呑まして居た、又月足らずの子をも保育する器が二つあつた。救護院の入口には子供受取所がある、棄兒は警察が拾ふて持て來る又は母が子を渡すのもあり、親が黙つて持て來て置くのもある、棄兒養育院の傍に別に一棟の傳染病室がある。

又本館には幼い孤兒を收容して居る。長い室に三歳以下と思はれる子供が、三十餘人一方の窓に沿ふて一列に椅子に腰を掛けて居り、中央に木馬が置いてあつて、保母が二人附いて居つた、子供の行水もしてやる、又寢室が澤山あつて、病氣の傳染を慮り、各室の中に硝子の仕切りがあつて、四隅に寢臺が一つづ、五十近くも置いてあり、乳母や保母が多く附いて居る、此外父母が日中勞働の爲めに子供を預ける所があつて、三歳位までの子

供が三十人位居つた。二室に仕切つてあつて、運動遊戯も出来る、行くと子供が握手せんと争ふてやつて來て、中には菓子とせがむ者も居た。又亦兒から一歳位までの子が二十八人預けてあつて、子車にねて居た。父母の病氣中又は極貧で、其子を預るのもある。

大きな子供には男女の寄宿舎が別々にあり、其内に教場もあつて、普通教育が授けられる、女兒は十歳前後の者が四十餘人居り、女教師と助教の女と二人で授業して居た。男兒の方は五十餘人の一組があり、別に十三四歳以上の者十人計りの一級がある、食堂は餘りきれいではない、此兩寄宿舎は家も古くて、むさくるしい、二階から四階までは寢室である、寢床は清潔で、左右の窓に沿ふて並んで居る。大きな男の子の寝る所は、談話を防

ぐために分房となり、前面は柵で仕切つてある。又懲戒室が三ツ四ツあつて、悪い者は之に閉込め外から錠を下す、戸は格子形になつて居る、寢室には番人の寝る所もある、運動場は男女大きな小さい子により、別々にある。

此救兒院には生れた其日の赤兒より廿一歳迄の者を收容する、子供は此所で受取り地方の救兒院に分けて送り付けるから、子供の出入常ならず、二三日で出る者もあり二三週間で出る者もある。

ロシアの首府ペテルブルグで見たのは嬰兒の養育院である。(明治三十五年五月二十三日參觀) 此所には八百五十人ばかりの赤兒を收容し、中には月足らずの兒もある、まだこれより多數の時もあるといふ。乳母は夏になると他に儲けがあるから不足で今も不足である、モスコイなど工場の多い

所では、乳母の不足が一層甚しいといふ。赤兒の百分の十五六は棄兒であつて、後は私生兒とか又は貧乏で父母が養ふことの出来ない者を持って來るのである。中には母を子に附けて其儘入院することもあるが、母は多くは之を嫌ふといふ、病室などもよく備はり、傳染病室は別になつて居る、又種痘用の犢が畜ふてある、パンは内で拵へる。ソップにも品々ある、肉もあつて食物は良い。收容せる子供の中には、私生兒も少くなく、身分の者の落胤なども名を隠して斯んな所に容れられることもあるとかでそんなのは自ら入院費も高いといふ、ロシアには斯る養育院が方々にある。ペテルブルグの養育院には赤兒を數ヶ月置いて、それから地方の養育院へ送り、地方で育てるのである。院内には養育室が幾つもある、そこを通る

と十數人の乳母が赤兒を抱いて列を作つたやうに立つて丁寧に挨拶する、皆白い着物に赤い帽子をつけて居る。其外子供受取所、診察所、外科手術所等がある、又月足らずの兒を養ふ所では子供を衣服に包んで、寒暖計を挿して居る。斯る養育院が近傍に又新たに出來るといふことであつたら、今はもはや出來たであらう。此近所に子守の學校もある由だが見なかつた。參觀 中副院長と女頭のメダルを胸に多くつけたのが附添ひて案内された。

斯る託兒所、救兒院などは、文叻の社會には必要なものであるが、日本にはまだ備はつて居ない。東京の築地本願寺の一隅に託兒所が出來て居る。うながそれは、出征軍人の幼兒を託するためのもので廣く労働者貧民等の爲めの常設のものではな

い、望むはこの常設の者で、且方々に多く出來ねばならぬ。労働する女が、脊に子を締め括つて、車の後押をしたり、物を運んだりして居るのを見るとき、氣の毒になる、眞の文明は表面の修飾のみならず、裏面の整頓改良がなくてはならぬ。而して斯る事業は、婦人の率先盡力すべき事であると思ふ。

聞く所に因ると築地本願寺の出征軍人の保育所は今度永續して學士の所謂託兒所にする由頃日の新聞に見えた。そして尙ほ事業を擴張し軍人の幼兒に限らず一般に内職の爲め晝間兒女の保育に手廻り兼ねる者を收容し進んで同區以外他區居住者の需めにも應ぜん目論見にて近々協議會を開き決行すべしと